

岡山大学桃太郎 FD・SD
バーチャルフォーラム 2021

“Collaboration: The Key to Learner-Centered Education”

～学生中心の大学教育を実現するチーム～

2021年度（令和3年度）

2021年9月10日（金）

目 次

・スケジュール	
・プログラム1	
バーチャルポスター発表	
・発表資料	
1. ゲーム要素を加えた学習成果のフィードバックが学習意欲の向上に与える影響—貧困家庭の子どもに対する教育ビッグデータを活用した学習支援— 山本 康裕・文 翔・楊 碧瑩・李 明口・寺澤 孝文	2
2. 学習管理システム・Microsoft365 を用いた相互評価の実践とその効果 百田 龍輔	5
3. Interactive Online Videos Using Flipgrid (使用言語：英語) Neil Cowie	8
4. Student-to-Student Learning in a Model UN Class (使用言語：英語) Naomi Fujishima	10
5. オンライン・フィールドワーク型の授業実践 吉川 幸	13
6. 全学日本語コースにおけるチームティーチングの意義と課題 内丸 裕佳子・守谷 智美・末繁 美和・長野 真澄	15
7. Linking PBL to Community Needs (使用言語：英語) Aubra Bulin	18
8. Google Chrome 拡張機能 Language Reactor (旧 Language Learning with Netflix)を活用した日本語授業例 秋田 節子	21
9. コロナ禍における岡山大学のオンライン授業の評価結果及び今後の展望と課題 宮本 千代・白神 京香・飯塚 誠也・籠谷 裕人	24
・ポスター発表の参加方法について	28
・Zoomについて	28
・プログラム2	29
ライトニングトーク&パネルディスカッション	
・西田 陽介	
・三好 智子	
・飯迫 八千代	
・田中 岳	
・アンケート	29

スケジュール

日付： 2021年9月10日（金）

総合司会： 伊野副学長・高等教育開発推進センター副センター長

9:20	Zoomの入室開始
プログラム1	
9:30～ 10:15	バーチャルポスター発表(Web発表)
10:15～10:20	ポスター発表総括
10:20～10:30	休憩
プログラム2	
10:30～10:35	開会あいさつ
10:35～10:40	プログラムガイダンスと登壇者紹介
10:40～11:05	ライトニングトーク ～専門分野の観点から～
11:05～11:30	パネルディスカッション 『学生中心の大学教育を実現するチーム』
11:30～11:45	質疑応答
11:45～11:50	閉会あいさつ

No	1
タイトル	ゲーム要素を加えた学習成果のフィードバックが学習意欲の向上に与える影響 —貧困家庭の子どもに対する教育ビッグデータを活用した学習支援—
登壇予定者	山本 康裕・文 翔・楊 碧瑩・李 明口 寺澤 孝文
所属	教育学研究科教育科学専攻 学術研究院教育学域（教育心理学）
ブレイクアウトルーム 名称	1.山本 康裕 他
概要	本プロジェクトでは、英単語 e-learning サービス「マイクロステップ・スタディ」を利用する学習者（中学生）を対象として、その学習量に応じて木を成長させるゲーミフィケーション要素を加えたウェブサイト（「学習の森」とよぶ）を開発し、学習成果をフィードバックすることで学習者の学習意欲を向上させることを目的とした。「学習の森」を導入した結果、「学習の森」が学習意欲向上に影響を与えたことが明らかになった。

ゲーム要素を加えた学習成果のフィードバックが学習意欲の向上に与える影響
 ー貧困家庭の子どもに対する教育ビッグデータを活用した学習支援ー

○山本康裕¹・文翔¹・李明璐¹・楊碧瑩¹・寺澤孝文²
 (¹教育学研究科・²学術研究院教育学区 (教育心理学))

課題と目的

課題

現在、経済格差による教育格差拡大が深刻な問題として取り上げられている。貧困家庭の子どもたちは他の子どもに比べて、学校外教育を受けられることが難しく、学力格差が生じていると考えられる。さらにそのような子どもたちには「勉強が得意でない」経験が積み重なることから、学習意欲の低下が深刻化していると考えられる。

⇒ 学習支援が必要である

【マイクロステップ・スタディ

教育ビッグデータを活用したe-learning サービスであり、且々のわずかな学習の積み重ねの効果を可視化し、学習者一人一人にフィードバックし、意欲を高めることが可能

+

フィードバックに学習量を反映させるゲーム要素を加えることで、より意欲的に学習に取り組めるようになると考えられる

本研究の目的
 岡山大学教育学研究科・教育科学専攻の授業の一つであるPBL (Project Based Learning)にて、大学院生7名でチームを組み、マイクロステップ・スタディの学習量に応じて木を育てるゲーム「学習の森」を開発し、貧困家庭の子どもたちに対してマイクロステップ・スタディと「学習の森」によって学習支援を行い、子どもたちの学力及び学習意欲を向上させる

方法

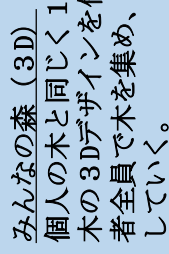
「学習の森」の開発

2020年8月～10月「学習の森」を開発した。

2D&3Dデザイン

個人の木 (2D)

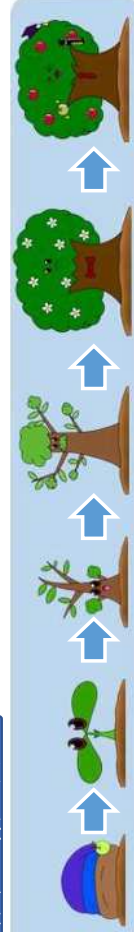
マイクロステップ・スタディの学習量に応じて成長する木を、種から樹木までの10段階に設定してデザインした。



みんなの森 (3D)

個人の木と同じく10段階の木を3Dデザインを作成。対象者全員で木を集め、森を作成していく。

成長段階の例



プログラミング

仮想専用サーバー (VPS) を構築

マイクロステップ・スタディから週1回に学習データを取得

PHPにより学習データ処理&データベースに送信

JavaScriptにより木の成長段階を自動化処理

学習者のスマホの画面に反映する



成長経験値

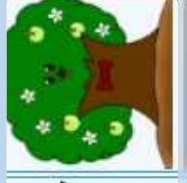
学習量に応じて成長経験値が自動的に増加する。成長経験値が一定数に達すると木が次の段階に成長する。

成長経験値



成長経歴

木が次の段階に成長した日付を自動的に記録する。学習者は今までの成長記録を明確に把握することができる。



2020/12/09/
level18達成



学習意欲の調査



◎支援の対象となった公設塾とは：
放課後や土曜日、長期休業中に公民館や学校の教室を利用して、貧困家庭の子どもを対象に授業で学習したことへの復習や振り返りなどを行う公設塾である。

◎具体的には：
チーム全員で現場を訪れ、職員の方々とミーティングを通じて現場の状況を把握し、実際に塾に通っている子どもたちと接する中で、どのような学習支援が必要であるのかを調査した。

調査対象：中学生10人（1年生から3年生まで）

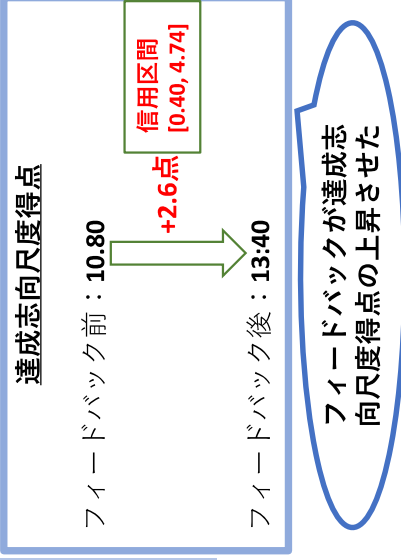
アンケート質問用紙：
「学習の森」の導入前後の学習意欲の変化を測定するため、**学芸大式学習意欲検査（簡易版）**（下山・林ら，1983）と**特性的自己効力感尺度**の検討（成田ら，1995）を参考にして、31項目の質問用紙を作成した。

◎「学習の森」を加えたフィードバック（FB）によって学習意欲が上昇したといえるかを統計的に検討した（右図）。

達成志向の尺度得点がFBによって上昇したと捉えることができる
⇒ 2か月という短期間であるにも関わらず、「学習の森」を加えたFBが学習意欲の向上に対して効果を持つことが明らかとなった

■実際の子どもの声（一部）

- ・中々時間が取れませんが、楽しく学習できる教材だと思います
- ・森が増えるのが楽しかった
- ・成果が目に見える形で表現されていて、わかりやすい



質問項目（達成志向下位尺度項目）

むずかしい問題をやっていると、すぐにつかれて、やめることが多い。☹

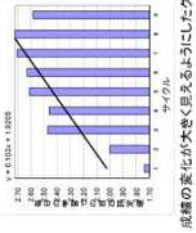
むずかしい問題でも、いろいろなやり方を考えて、がんばる。☺

国語のむずかしい問題でも、ねばり強く考えるほうだ。☺

勉強がいやでも、すぐにやり始める。☹

算数(数学)のテストで、とげなかつた問題を先生に聞いたり、調べたりしてみても、わかるようになるまで考える。☺

本研究では、貧困家庭の子どもたちに対してマイクロステップ・スタディとその学習量を反映させるゲーム要素「学習の森」を加えたフィードバックによって貧困家庭の子どもたちに対して学習支援を行った。右グラフは公設塾の生徒のうち、特に学習量が多かった子どもの成績を表している。初めは成績が低くても、学習を積み重ねていくことによって成績が上昇していることが分かる。また学習意欲の調査からも、2か月という短期間での学習支援であったにも関わらず、学習意欲が向上したことが明らかとなった。



成績の変化が大きく思えるようにしたグラフ

No	2
タイトル	学習管理システム・Microsoft365 を用いた相互評価の実践とその効果
登壇予定者	百田 龍輔
所属	学術研究院医歯薬学域（医）人体構成学
ブレイクアウトルーム 名称	2. 百田 龍輔
概要	論文の査読や研究費の申請など、相互評価は学術活動の基盤的役目を果たしている。にもかかわらず、現在の日本の大学教育において、学生は相互評価を行なう機会はあまりない。本発表では、Moodle などの学習管理システムや Microsoft365 を活用した講義における相互評価の実践例を紹介するとともに、その効果について考察する。

Easy to set up



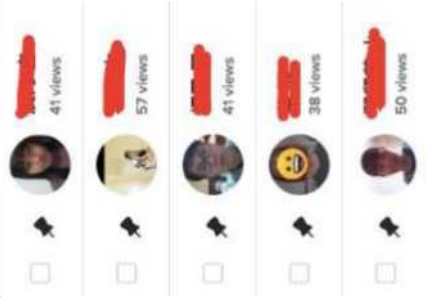
Easy for students

To make a good video, I practiced and checked many times. The process helped me a lot. Also, as I watched the other's videos, I could learn new things that I didn't know, so it was interesting as well.
(First year student)

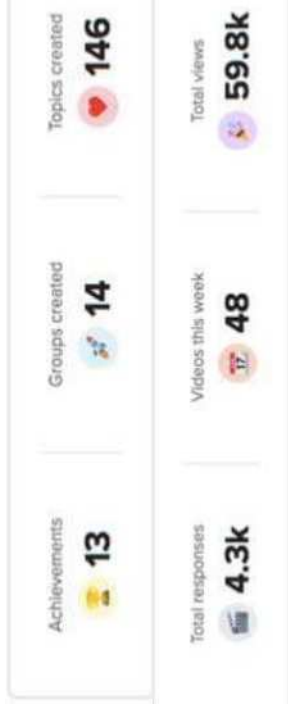


Flipgrid

Easy to give feedback



Activity snapshot



Interactive online videos using Flipgrid. Neil Cowie. Department of Foreign Languages

学習管理システム・Microsoft365を用いた 相互評価の実践とその効果

百田龍輔@人体構成学・医歯薬学域 (医)

目的

Rubricを用いた学生間相互評価を講義で行うことで、自身が到達目標を意識し、学生間相互のフィードバックを通じて、客観的に自らの到達度を振り返り、改善につながる学習を提供したい。

背景

論文の査読や研究費の申請など、相互評価は学術活動の基盤的役目を果たしているにも関わらず、日本の大学教育において、相互評価を行なう機会はあまりない。一つの理由として、集計、フィードバックに伴う教員の作業が煩雑になることが挙げられる。

近年、大学のICT環境の整備、スマートフォンなどの個人端末の普及に伴い、普段の講義で相互評価活動を行うことが可能となった。

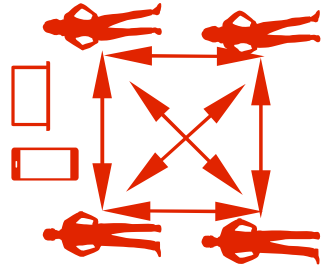
問題

多くの大学で利用されているMoodle等の学習管理システムやMicrosoft365を活用し、講義でどのような相互評価が可能だろうか？

ここでは、

(1) 学習管理システムを用いた提出課題の相互評価

(2) グループ学習発表での相互評価の実践例を紹介するとともに、その効果と問題点について考察する。



方法・手法・工夫

(1) 提出課題の相互評価

実施当時、運用していた学習管理システムWebClassの相互評価機能を用いた。現在、岡山大学で稼働中のMoodleにも同様のWorkShop機能がある。

提出課題：1) 2) の概略図を描いて、写真やスキャナーを用いて取り込みアップロードして提出してください。

<-----指示線はこのように矢印を用いてください。

1) 以下の語句を用いて心臓を描いてください。

・心臓・心膜腔・心室・心室中隔・心房・心房中隔・冠状動脈・大動脈弁・肺動脈弁・三尖弁・僧帽弁・乳頭筋・腱索・心内膜・心筋層・心外膜・洞房結節・房室結節・房室束・プルキンエ線維

2) 以下の語句を用いて動脈系の概略図 (P.105, 118などを参考に) を描いてください。

・大動脈・肺動脈・肺静脈・上行大動脈・大動脈弓・下行大動脈・胸大動脈・腹大動脈・腕頭動脈・総頸動脈・内頸動脈・外頸動脈・鎖骨下動脈・上腕動脈・橈骨動脈・肘間動脈・腹腔動脈・上腸間膜動脈・下腸間膜動脈・総腸骨動脈・大腿動脈

相互評価：

項目数と構造物の大小・位置関係が正確に表現されているかについて、以下の評価表を用いて学生1人当たりそれぞれ5人分の評価を行った。

相互評価による効果を見るために、相互評価課題を行なっていなかった前年度の学生の成績と同様の問題 (図) を用いて、それぞれの得点について独立2群検定を行った。解析にはR stat module、グラフ描画にはggplot2を用いた。

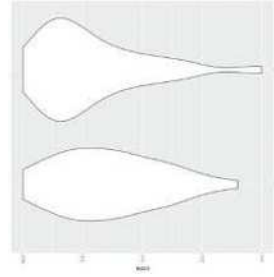
Criteria	Levels				
	5個以下	5~11個の項目が描かれている。	12個以上描かれている。	15個以上描かれている。	全て描かれている。
項目数：指定されている項目の数について。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係が基底的く不正確。5つ以上の間違いやがある。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係がやや不正確。3・4箇所の間違いやがある。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係がほぼ正確に表現されている。間違いの箇所は軽微な2箇所程度。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係がほぼ正確に表現されている。間違いの箇所は軽微な1箇所程度。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係が全て正確に表現されている。
正確さ	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係が基底的く不正確。5つ以上の間違いやがある。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係がやや不正確。3・4箇所の間違いやがある。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係がほぼ正確に表現されている。間違いの箇所は軽微な2箇所程度。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係がほぼ正確に表現されている。間違いの箇所は軽微な1箇所程度。	各項目の名称・大小・上下・前後・太さ・位置関係が全て正確に表現されている。

(2) グループ学習発表での相互評価

右下のRubricをもとにMicrosoft365のFormsで評価表を作成した (QRコード)。
 約110名 (学生100、教員10) の評価者が発表後に一斉にグループ毎の評価を行なった。
 Formsの設定は記名式とし、複数回投票可能であるが、最後の投票を有効とした。
 また学生と教員の評点の分布をPythonのグラフLibraryのSeabornを用いて描出した。

結論

(1) 提出された課題の例とフィードバック
 相互評価で高評価の例と間違いを指摘するフィードバックの例を右に示す。



小テストによる点数の比較
 相互評価: 平均 +/- 標準偏差
 相互評価無し (左) : 6.42 +/- 2.20
 相互評価有り (右) : 7.18 +/- 2.25
 (p = 0.0036 < 0.05)

(2) グループ学習発表での相互評価

学生による評価は高得点側に集中しているのに対して、教員による評価は低い側にピークがシフトしており、学生の評価に比べて厳しいことがわかる。

まとめ

(1) 同等の難易度の知識を問う問題を問う問題について、相互評価を行なった群の点数が有意に良かったことから、相互評価活動は知識定着に効果があったと考えられる。客観的に他の提出物を見て学び、評価し、他者による評価を受け入れることで自身の学習を振り返り改善する機会となったものと考ええる。

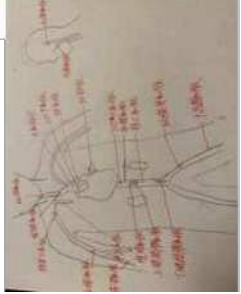
(2) 学生の評価が高得点側に集中する事について、「手っ取り早く入力して小テスト問題に備えたい」という理由が考えられる。評価のための時間を十分に取る、真面目に評価に取り組む事へのインセンティブを与えるなどの対策が必要かもしれない。

Feedbacks

- 心臓の内側と外側に分けて図を描いていてとても分かり易かったです。
- 細かい部分では拡大図が書かれており、見やすかったです。
- 太さの関係や厚さの関係が正確に記載されているように感じました。
- 複数の図に丁寧にまとめているので、非常に見やすいです。色ごとに識別されているので、後に見直す際にも分かりやすいと思います。
- 素晴らしいです。

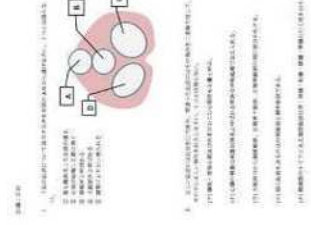


高評価の例 (→)
 間違い指摘の例 (↓)



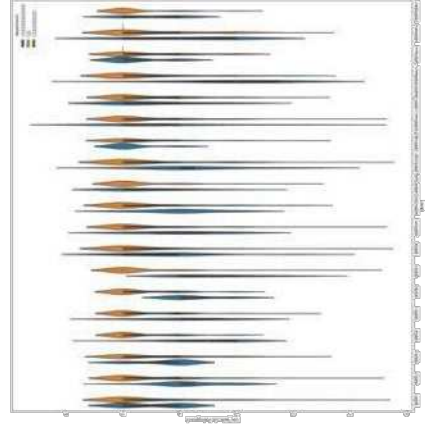
小テスト問題

相互評価前に用いたもの (左)
 相互評価後に用いたもの (右)



グループ発表評価RubricとFormのQRコード グループ評価 (青: 教員 橙: 学生)

Category	Item 1 (10%)	Item 2 (10%)	Item 3 (10%)	Item 4 (10%)	Item 5 (10%)	Item 6 (10%)	Item 7 (10%)	Item 8 (10%)	
Content	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.
Form	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.	Thesis is clear and easy to understand. The content is well organized and easy to follow. The content is well organized and easy to follow.



No	3
タイトル	Interactive Online Videos Using Flipgrid
登壇予定者	Neil Cowie
所属	全学教育・学生支援機構 基幹教育センター
ブレイクアウトルーム 名称	3. Neil Cowie
概要	<p>As a result of the move to online teaching in 2020, alternative ways for students to present their ideas and practice communication have emerged. These have the potential to make students more engaged and active than in a face-to-face context. One of these is the Flipgrid video application. Flipgrid works in the following way: a teacher sets up a task on the Flipgrid dashboard and shares a link with students. Using their digital devices students then make a video with Flipgrid's easy-to-use editing tools. Once a student has uploaded their video other students can give feedback through written comments or by making a short video response in return. This can create a positive feedback loop in which students can actively respond to each other's videos. The teacher can also give feedback by email or a video response. In addition, both the teacher and students can access an AI generated script of each video which also has a basic parts of speech language analysis function. In sum, the functions of Flipgrid encourage students to independently practice their communication skills and learn actively with their teacher and classmates.</p>

No	4
タイトル	Student-to-Student Learning in a Model UN Class
登壇予定者	Naomi Fujishima
所属	全学教育・学生支援機構 基幹教育センター
ブレイクアウトルーム 名称	4.Naomi Fujishima
概要	<p>The Model United Nations (MUN) Course [上級英語] is offered each year in Terms 1 and 3. The goal of this course is to prepare students for participation in a Model UN conference held in Japan. Before the pandemic, the conferences were held face-to-face, but for the past two years, they have been conducted online. It is a challenging course as students learn about MUN procedures and concepts by representing a country and joining meetings with students from other universities. The teacher acts as a guide as students do research and collaborate using multiple platforms such as Moodle, Google Docs, SNS, and Zoom. This poster presentation will introduce the MUN course and JUEMUN 2021 conference. Student reflections will also be shared along with implications for teaching and learning.</p>

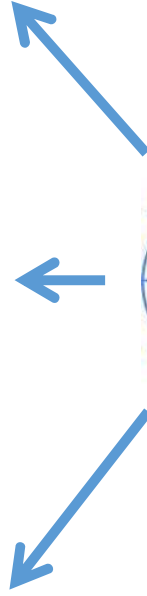
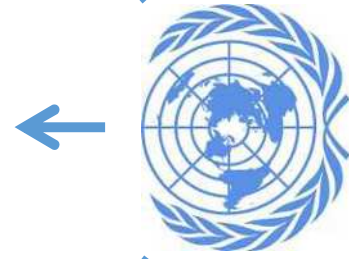
Student-to-Student Learning in a Model UN (模擬国連) Course [外国語教育部門]

Details: 100分・7週授業（2021年度第1学期一金7・8限）

Students learn to:

- do research on SDGs
- represent a country
- prepare a position paper
- make a 60-second policy speech
- collaborate with other students
- write UN resolutions

All in English!

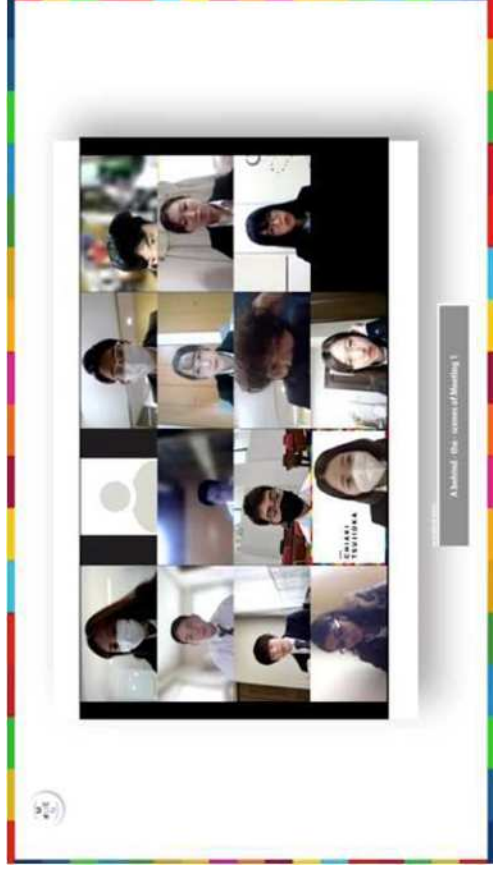


Preparation for JUEMUN (Japan University English Model United Nations) Online Conference-June 25-27, 2021
Conference Theme: Appropriate and Resilient Development for Environmental Sustainability

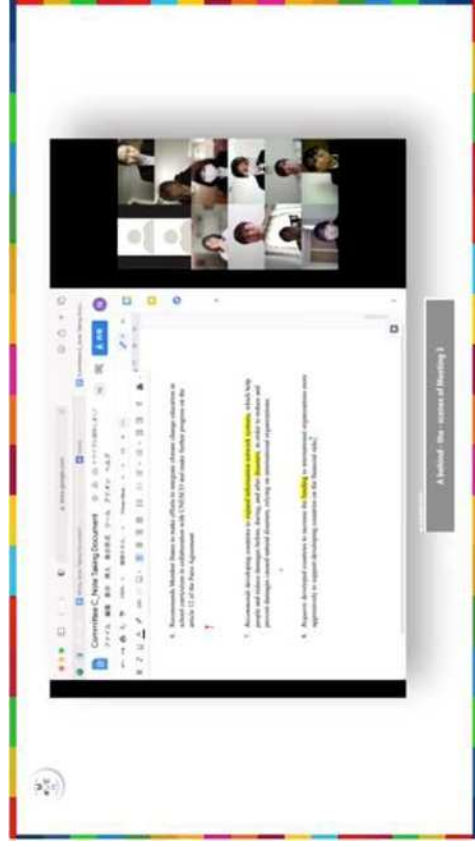


The benefits of student-to-student learning

- Students can:**
- contribute their ideas and opinions to the discussions
 - get encouragement from their peers
 - get advice on their research
 - meet students from other faculties and universities
 - collaborate on working papers and resolutions
 - support each other when they need help



Delegates in meeting room



Collaborating on a document

Benefits of an online conference

- Students can participate from anywhere in the world.
- Working papers can be shared using Google Docs.
- Faculty advisors can more easily observe the writing process.

No	5
タイトル	オンライン・フィールドワーク型の授業実践
登壇予定者	吉川 幸
所属	全学教育・学生支援機構 基幹教育センター
ブレイクアウトルーム 名称	5. 吉川 幸
概要	<p>実践型社会連携科目では、地域に学生が出向き社会課題に向き合う姿勢づくりと経験学習を重視しているが、コロナ禍でフィールドに出向くことが困難になり、代替手段として同期型オンライン授業を実施している。本報告では、岡山県井原市との教育実践における教員と地域コーディネーターの役割分担、学生の当事者性の育み方について、同期型オンライン授業での工夫等を通じて報告する。</p>

オンライン・フィールドワーク型の授業実践

吉川 幸 myoshikawa@okayama-u.ac.jp
 (全学教育・学生支援機構 基幹教育センター 共創教育部門)

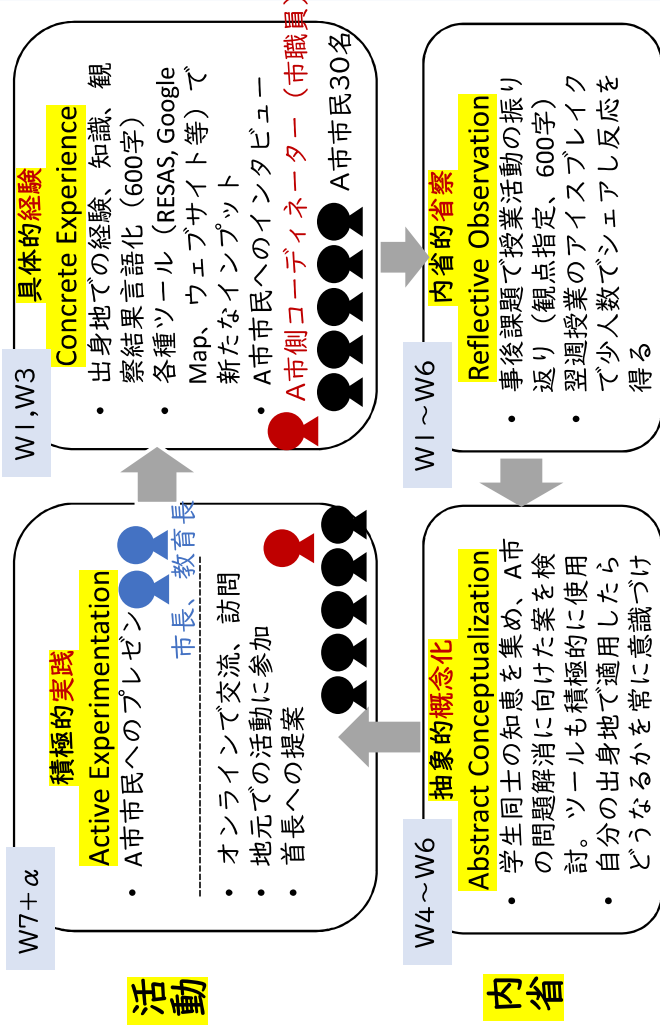
目的

オンライン授業で学生の心に火をつけ、経験学習サイクルを有効に機能させるレバレッジポイントは「活動」か「内省」か



きつかけの疑問 実践型社会連携教育科目もコロナ禍下では実地での「経験」機会を阻まれる。「活動」がオンラインになると、学びの成果を得にくくなるのか？

授業構成 ※経験学習モデル(Kolb, 1984)との照合



科目情報: 「地域の未来デザイン」1単位、210名
 2021年度第2学期木曜7/8限 同時双方向型オンライン授業
 ※授業実施報告書(11月完成予定)をお送りできます。
 右記からお知らせください。昨年度版もダウンロードできます。
<https://ux.nu/UNgs4>



結果 ※学生が高く評価したポイント、授業上の工夫

- ①現実・本物を知る ←コーディネーターによる、協力市民の確保
 - 興味のある分野に携わっている井原市の方を自分で選んでお話を聞く、質問するという回がとても刺激的で、良い経験になった。
- ②専門分野や志向が近い学生同士でのグループ編成
 - ←希望調査×提出された課題により教員が振り分け
 - 学生だけでなく地域の方々のお話を聞けるととても貴重な機会をいただけ、さらに私の将来に関わるであろう分野について深く聞けたので、この機会を必ず将来に生かしたいと強く思います。
- ③問題解決を図ろうとする経験
 - ←抽象的概念化の意識づけ
 - 地域の課題に対してこれほど真剣に考えたことはなかったので、とても良い経験になりました。この講義で学んだことを自分の地元でも生かしていきたいです。
 - グループで、そして自分自身で課題の解決方法を考えることで、大学や社会で必要になってくる問題解決能力を向上することができた。

まとめ

実践型社会連携教育の学習効果は「内省」を重点化することで質的に高められると考えられる。また、そのためには手ごたえのある「経験」*と抽象的概念化につながる問いが必要。
 *向き合うレディネスを育てておき、手加減のない本物を経験させる。

No	6
タイトル	全学日本語コースにおけるチームティーチングの意義と課題
登壇予定者	内丸 裕佳子・守谷 智美・末繁 美和・長野 真澄
所属	全学教育・学生支援機構 基幹教育センター
ブレイクアウトルーム 名称	6. 内丸裕佳子 他
概要	<p>チームティーチング（TT）とは、複数の教師がチームを組んで、授業の計画・実施・評価を協力的に行うことである。岡山大学の「全学日本語コース」では、四技能を総合的に学ぶレベル別の「総合クラス」でTTが採用されており、複数の教師が連携しながら各クラス週4回の授業を展開している。本発表では、この取り組みについて紹介し、より良いTT体制の構築が円滑なコース運営と学習者主体の学びにつながることを示す。</p>

全学日本語コースにおけるチームティーチングの意義と課題

発表に関するご意見、ご質問等受付URL
<https://forms.gle/GH21eNBsAhtynG9A>

全学教育・学生支援機構 基幹教育センター 日本語教育部門
 内丸裕佳子・守谷智美・末繁美和・長野真澄

1. はじめに

1-1. チームティーチング(TT)とは?

- 2人以上での協働による教育指導体制
- ささまざまな形態がある

1-2. 全学日本語コースとTT

- 岡山大学全学の留学生を対象とした日本語のコース
- 総合クラスでTTを実施 (表1 参照)

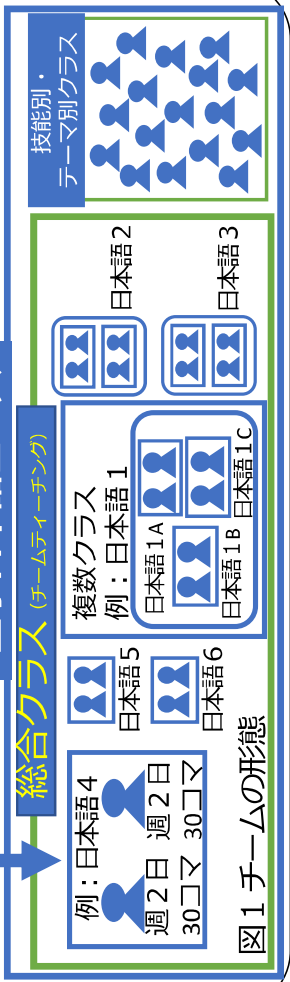
表1 開講科目 全学日本語コースに関する詳細はこちら <https://bit.ly/3lWv7Oz>

レベル	総合クラス	技能別・チーム別クラス
初級	日本語1	読み書き1
2	日本語2	読み書き2
3	日本語3	多読・多聴
4	日本語4	多読・多聴・多読・多聴
5	日本語5	多読・多聴・多読・多聴
6	日本語6	多読・多聴・多読・多聴
7		多読・多聴・多読・多聴

4技能を学ぶ総合クラス

2コマ×週4日 = 8コマ/週 (60コマ/学期 4単位分)

全学日本語コース



2. 全学日本語コースにおけるチームティーチング

2-1. TTは教育のPDCAサイクルを意識化する作業



図2 ADDIEモデル (PDCAサイクルを教育設計に応用したもの)

TTメンバー全員で意見をすり合わせてADDIEを共有し循環させる

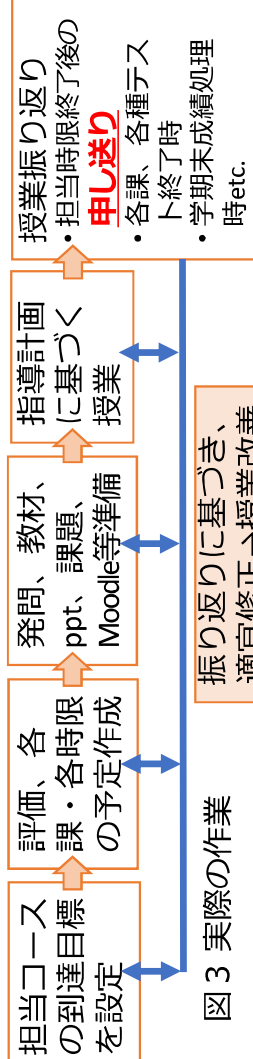


図3 実際の作業

2-2. TTの特徴

- 密なコミュニケーション (例) 担当時限終了後の申し送り
 - 学習者の様子
 - 進捗状況
 - 授業での成功/失敗 etc.

必要に応じて
 次回の授業までに
 調整および修正

到達目標、評価、授業活動に関する
 対等な立場での協働的な取り組み

3. チームティーチングによる 教育上の効果

◆ 学習者側

- ① 参加者の多様性を受け入れる基盤の醸成
- ② 多様性の受容による知的刺激と深い洞察
- ③ 複数の教員による手厚い支援に対する信頼、親しみ
→ 学習に対する自信と新たな挑戦意欲

◆ 教師側

- ① 多様な意見、発想、専門性、授業方法による刺激
→ 授業実践力の向上
→ コースの客観性・信頼性・妥当性の向上
- ② 学習者や授業に対する複眼的な捉え方と支援
→ 授業運営の内省による教育の質の向上
- ③ 建設的な意見交換と互いの理解
→ コミュニケーション能力の向上
- ④ 担当コースに対する役割と責任の自覚
→ 担当コースにおける到達目標の意識化
→ 他レベルとのアーティキュレーションの意識化

教師にもITによる協働学習が起こる

→ 全学日本語コースの全体にも好影響

4. チームティーチングの課題

- ① 担当コースの運営を軌道に乗せるまでの時間と労力
- ② 学習観・教育観等のすり合わせにかかる負担
- ③ 知識・技術力の調整に関する負担
- ④ 密なコミュニケーションと対等な人間関係の構築
 - ・ リーダーへの依存性
 - ・ 話し合い、教材開発、授業振り返り等における各自の取り組みの違い
 - ・ 人数が多い場合 → 調整の負担

5. おわりに

◆ 今後の課題：TTを円滑に進めるために

- ① 全学日本語コースレベル1～7におけるアーティキュレーションの明示
- ② 全学日本語コース各レベルにおける到達目標の明示
- ③ TT成功事例の共有と導入
- ④ 各教員の特性を生かした人材配置
- ⑤ 人材育成

- ・ 日本語教育研究会でのFD研修（日本語教育部門で年4回開催）
- ・ 特別公開講座（日本語教育部門で年1回開催）

No	7
タイトル	Linking PBL to Community Needs
登壇予定者	Aubra Bulin
所属	全学教育・学生支援機構 高等教育開発推進センター
ブレイクアウトルーム 名称	7. Aubra Bulin
概要	Project-based learning (PBL) has become more widespread producing interesting learning outcomes. Additionally, connection to real issues supports student motivation and the university mission of education forSDGs. In this session faculty can look at a specific class example of applying PBL methods to coursework as students worked together to help local businesses.

PROJECT BASED LEARNING

is a teaching method in which complex real-world problems are used as the vehicle to promote student learning of concepts and principles as opposed to direct presentation of facts and concepts.

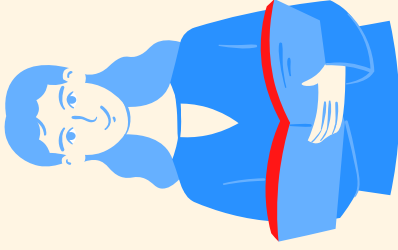


WHY "PBL"

Research indicates that the use of PBL can improve outcomes such as:

- Development of empathy,
- Identification of purpose for learning, and
- Authentic and deep learning across grade levels.

The method is particularly effective when paired with community outreach or SDGs content.



HOW TO USE PBL



Start with an overarching problem for the students to solve.

Use an additional framework like Design Thinking to encourage student innovation as they solve problems and complete their project.



Throughout the term, provide instructions, information, and guidance as they explore solutions to the problem.



Students learn the necessary content through minimal guidance because they do their own work and apply what they have learned right away in a useful context.

COOPERATION WITH COMPANIES & PEERS

Students were required to work in groups with a business in the community which provided for the immediate application of their problem-solving, team building, and communication skills.



EXAMPLE CLASS

MULTILINGUAL MARKETING AND COMMUNITY CONNECTION

PBL Process

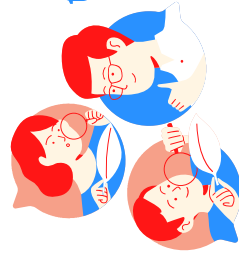
PROBLEM:

Local businesses are suffering financially because of the coronavirus pandemic.

CLASS GOAL:

Strengthen the relationship between the community and the university and connect local businesses to a wider range of customers.

Students were asked to form teams and find a community business that would partner with them to create multilingual marketing materials.



Students created names and logos for their teams like marketing companies. Each group presented weekly to showcase their ongoing work. Some students have continued working with their community business.

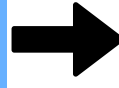
7

The number of businesses helped

STEP 1: Introduction and Guidelines for the Project

Lesson 1 Basics of Marketing

Lesson 2 Working with your Organization

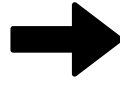


STEP 2: Collaboration with team and community to collect practical information and brainstorm solutions to problems.

Lesson 3 Organizational Profile and Goals

Lesson 4 Market Analysis

Lesson 5 Identify Problems and Solutions



STEP 3: Creation of prototype materials.

Lesson 6 Marketing Concept

Lesson 7 Marketing Materials



STEP 4: Presentation of all work completed, explanation of ideas, and reflection on learning.

Lesson 8 Marketing Pitch

No	8
タイトル	Google Chrome 拡張機能 Language Reactor (旧 Language Learning with Netflix)を活用した日本語授業例
登壇予定者	秋田 節子
所属	全学教育・学生支援機構 基幹教育センター
ブレイクアウトルーム 名称	8. 秋田 節子
概要	授業のオンライン化を経て、授業形態に依存する学習ではなく、セルフラーニングを基本とした自律型学習を確立するための授業設計を目指す。また学習者にとって最も関心が高かった「その場で日本人が考えながら話した」生の言語活動を題材として取り上げることで、授業の外での日本語使用を促すための橋渡しとなることを目標として、Netflix を活用した授業を提案する。

Google Chrome 拡張機能 Language Reactor (旧Language Learning with Netflix)を活用した日本語授業例

全学教育・学生支援機構 基幹教育センター 秋田 節子

参考
・田口真奈(2020). 『京都大学高等教育研究所 26号
「授業のハイブリッド化とは何か―概念整理とポストコロナにおける課題の検討―」
・村上昌文(2021.8.19). 「読解における教師の最後の役割」『むらログ日本国際の仕事術』
<http://mongolia.seesaa.net/article/483003361.html>
<http://mongolia.seesaa.net/article/483003361.html>
(参照2021-8-27)

背景① 日本語授業デザイン上の問題

文脈・場面
まともな訳解・
動画等のリソース

例：新聞雑誌の記事 デレシダ等編・動画
インターネットの情報 SNSの発信

文法	単語	単語	文法
単語	単語	単語	単語
単語	単語	文法	単語
単語	単語	単語	単語

問題点

1. わざわざ文脈から取り出した単語や文型を導入するために、再び単語や文型ごとに文脈や例文を与えて教えるのは二度手間
2. 日常生活では本来知らない単語や文法があっても、類推・理解しているのに、授業や学習では「習ってから」読んだり理解したりするのは実際的ではない
3. 「教えられる」学び方では、自律した学び方を阻害するのではないか

授業

文法	文脈・場面 意味・接続形・例文
文法	文脈・場面 意味・接続形・例文
単語	文脈・場面 意味・接続形・例文
単語	文脈・場面 意味・接続形・例文

教えるべき項目を抽出
リストアップ

文法
文法
単語
単語

背景② 学習環境の変化とICT化

- 授業のオンライン化
- 多様な授業形態提供の必要性
- 同期型授業の限界とオンデマンド化
- 動画配信事業の進展
- Google拡張機能の活用

学習条件の多様化
通信状況
国内外の時差
通信機器の制限

目的

個人のオンライン受講状況に対応できる授業形態の確立

自律的な言語学習を支えるための文脈から判断・類推する力を伸ばす
(学習できたかどうかを確認するためのテストではなく)
文脈から判断・類推したことの結果を確かめるためのテスト作り

文脈の中で学ぶために
NetflixとGoogle拡張機能Language Reactorを活用した
映画・アニメ・ドラマを活用した授業の提案

方法①

Google拡張機能Language Reactorをダウンロードして
Netflixを2言語字幕表示で視聴する



2 言語字幕をExcelなどの形式で
ダウンロード可能
↳ 文脈全体を確認

1 文ごとに表示及び音声再生
↳ 自分のペースで何度でも
再生・リピート練習

単語の訳語表示
2 言語字幕同時表示も可能
↳ わかからない箇所をすぐに確認可能

単語	日本語	英語	訳語
ほんとは	ほんとは	really	ほんとは
間が悪いんだから	間が悪いんだから	it's my fault	間が悪いんだから
这样的话的很麻烦	这样的话的很麻烦	it's so troublesome	这样的话的很麻烦

ドラマ・プレゼンテーションだけでなく
バラエティ番組やドキュメンタリーなど
オナーセンティックなリソースを教材として
活用しやすい

方法②

他にテレビ番組配信サイトTVer.jpや
YouTubeなどを利用して、視聴する

文脈の中で判断・類推した
内容が正しいかどうかを
Google formsを使って試す。
正解は即時フィードバック。

語彙の基礎的な用法であっても、
文脈の中では具体的に何を意味するのか、
また派生的な用法や使い手の独自の解釈による用法
などについても判断・類推する機会を作り出す

結果

個別の単語や文法の導入に追われることなく、学習者にとって理解しにくい文脈や、辞書を引いただけではわかりにくい
単語・文法・慣用表現やスキーマの違いなど、より重要な学習項目に集中することが可能に。

まとめ

全ての学習者の関心が得られるコンテンツを目指す
のではなく、多様な選択肢の提供を目指す。

課題

映画や動画内容によっては、学習者の関心に偏りがあったり、
関心が得られなかったりすることがある。

例：LGBTQに関する話題など

No	9
タイトル	コロナ禍における岡山大学のオンライン授業の評価結果及び今後の展望と課題
登壇予定者	宮本 千代・白神 京香 飯塚 誠也・籠谷 裕人
所属	学務部学務企画課教育支援グループ 全学教育・学生支援機構 高等教育開発推進センター
ブレイクアウトルーム 名称	9. 宮本 千代 他
概要	新型コロナウイルス感染症の拡大により、半ば強制的にオンライン授業を実施することとなった。これを受けてオンライン授業に焦点を当て、教学 IR 活動に基づく PDCA サイクルによる改善を図ったことについての報告を行う。

コロナ禍における岡山大学のオンライン授業の評価結果を踏まえた今後の展望と課題



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

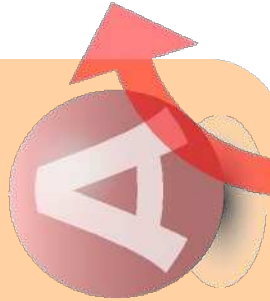
宮本 千代・白神 京香・飯塚 誠也・籠谷 裕人

【目的】

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、半ば強制的にオンライン授業を実施することとなった。これを受け、令和2年度はオンライン授業に焦点を当て、教学IR活動に基づくPDCAサイクルによる改善を図った。検証における改善点などを含め、これらの一連の活動について報告を行う。(本発表は、IR/IE室の活動の一貫として令和3年3月23日大学経営戦略会議で発表した内容に基づき、本フォーラムの趣旨に合わせて改訂したもの。)

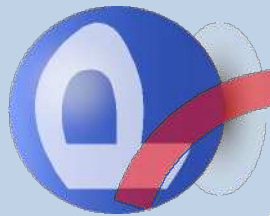
- ①オンライン授業実施のための注意事項を全学に周知し、注意喚起を行った。(定期的に改訂)
- ②教員のオンライン授業実施支援のため、全学教育・学生支援機構内に「EdTechサポートオフィス授業実施支援チーム」を設置し、相談受付、講習会実施など、オンライン授業実施支援を行った。
- ③各授業担当教員が改善に取り組んだ。

改善取り組みを実施 2回目のアンケートを実施し、 改善取り組みの結果検証



新型コロナウイルス感染症の急速な拡大により

令和2年度は 計画・検討の 余地なく



第1,2学期のアンケート実施

【学生】

良い点：場所や時間の制約がなく時間を有効活用できた。

音声や動画をアップした形のオンデマンド型授業に関しては、繰り返し復習できて理解度が高まった。

悪い点：課題が多い。資料がわかりづらい。フィードバックがない。特に、オンデマンド型（Moodle等への資料等の掲載）への不満が多く、満足度も30%以上が不満を感じている結果となった。

【教員】

良い点：新たな技術をマスターしたため今後の教育活動に活かせる。学生のレポートや質問の質が上がった。75%の教員が「オンライン授業を継続したい。一部継続したい。」と考えていることがわかった。

悪い点：授業準備に時間がかかる。学生の反応が把握しにくい。大学からのサポートがない。

オンライン授業 を実施

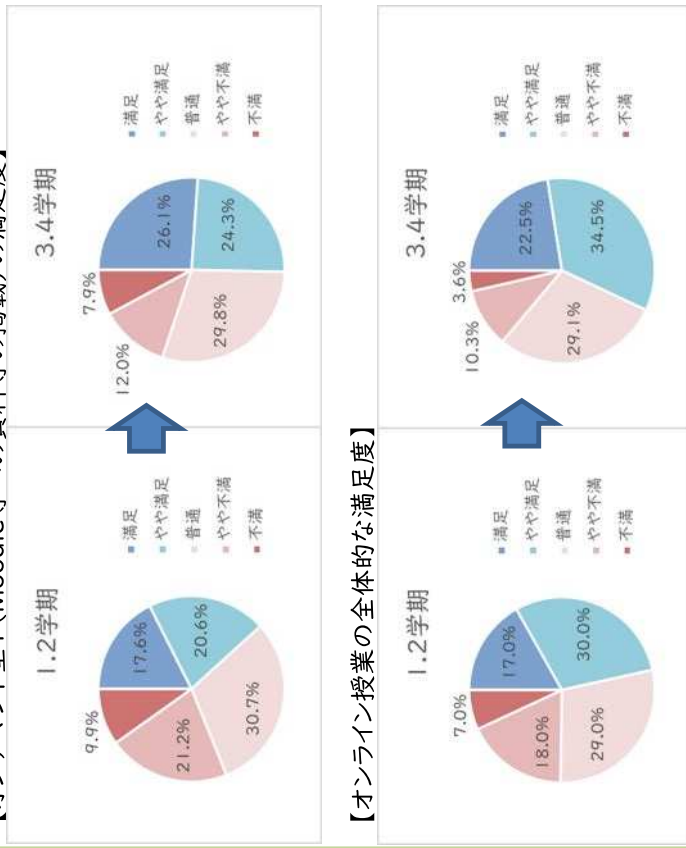


第1学期：全面オンライン授業

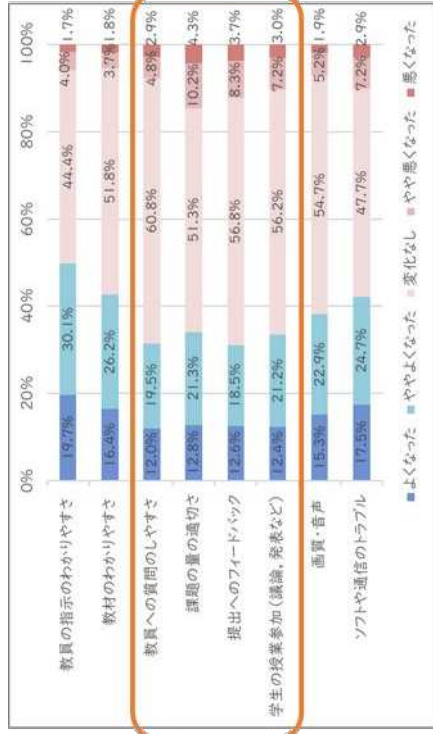
第2学期：オンライン授業を中心に実施。授業形態等に鑑み、対面授業も一部実施可

改善取り組みの結果検証(2回目のアンケート実施・1回目との比較)

【オンデマンド型I (Moodle等への資料等の掲載)の満足度】



【オンライン授業の全体的な満足度】



【検証における改善点】

結果検証では、一定の改善が認められるが、アンケート項目の立て方や、分析方法などにおいて改善するべき点も多い。

- 「満足」と回答した学生はどういう理由からなのか
- 大部分の「変化なし」と回答した学生は、よくて変化がないのか、悪くて変化がないのか
- 学年ごとに集計し分析するなど

そして次の「Plan」へ... 今後の展望と課題

これまでも、ICTを活用した教育の可能性は認識されていたが、浸透してはいたが、浸透してはいたが、ハードルが一気に下がったと言える。

この機を逃さず、**コロナが収束してもオンライン授業で得られた新たな技術やノウハウを活かし、より効果的な教育を行うとともに、効率化**につなげていくことは必須である。

一方で、まだ改善が必要な部分も多いことから、引き続き改善を促すとともに、教育効果を考慮せず効率化のみを重視したオンライン授業の開講は許可しないなどの対策も必要。

今後は、オンライン教育のルール等策定、オンライン授業改善の取り組み、オンライン授業実施支援など、教職協働で進めていくことが大事である。

・ポスター発表の参加方法について

9組の本学教職員・大学院生の皆さんが、教育のグッドプラクティスをポスターにまとめてくださいました。画面下のブレイクアウトルームのボタンを押して、お好きなポスター発表をご自由にご覧ください。発表者が待機していますので、コメントなどございましたら、画面下部「リアクション」ボタンより、「手を挙げる」ボタンを押して挙手してください。発話される際は、マイク機能がオンになっていることを確認して下さい。各発表とも概ね15分おきに新規の入室者むけに説明をさせていただきますこととなります。

○各ブレイクアウトルームごとに、以下の時間を目安に新規入室者向けの説明を行います。

- 1回目 9:35
- 2回目 9:50
- 3回目 10:05

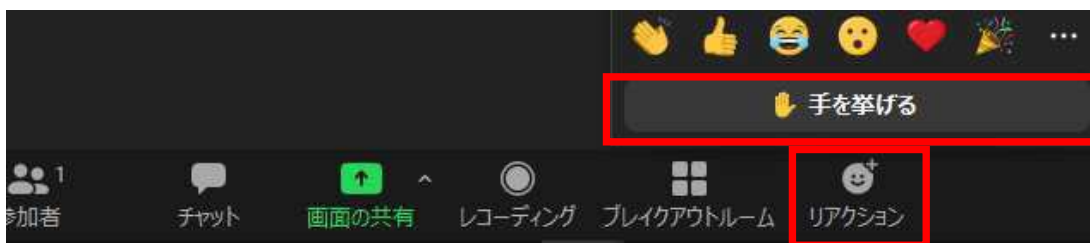
・Zoom について

・「手を挙げる」機能について

- 1 画面下のツールバーにカーソルを移動する
- 2 一覧から「リアクション」をクリック
- 3 上側に表示された画面の下部から「手を挙げる」ボタンをクリック（Mac の場合は中央にポップアップ表示）

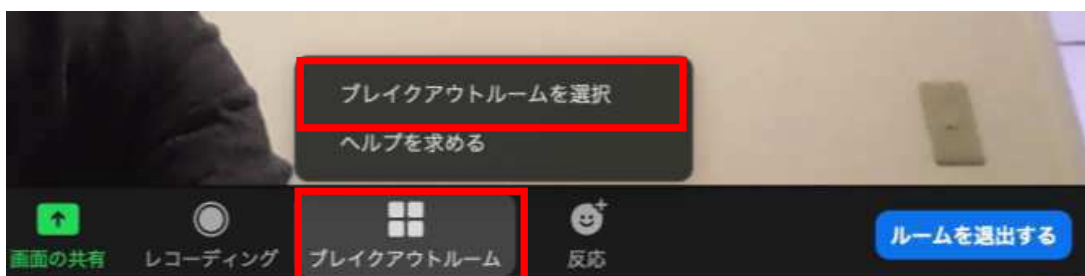
「手を挙げる」をクリックすると、主催者側の Zoom 画面に通知が届きます。

クリック後はボタンの文字が「手を降ろす」に切り替わるので、必要に応じて操作してください。



・ブレイクアウトルームの利用について

- 1 画面下のツールバーにカーソルを移動する
- 2 一覧から「ブレイクアウトルーム」をクリック
- 3 「ブレイクアウトルームを選択」をクリック



- 4 上側に表示された画面から入室を希望する箇所の「参加」をクリック

5000に参加しますか？「はい」を選択

The screenshot shows a breakout room interface titled "ブレイクアウトルーム-進行中". It contains a list of five participants, each with a "参加" (Join) button. A red box highlights the "参加" button for the first participant, "1.寺澤 孝文 他". A confirmation dialog box is overlaid on the right, asking "1.寺澤 孝文 他に参加しますか?". The dialog has two buttons: "はい" (Yes) and "いいえ" (No). The "はい" button is highlighted with a red box.

参加者	参加
1.寺澤 孝文 他	参加
2.百田 龍輔	参加
3.Cowie Neil James	参加
4.Naomi Fujishima	参加
5.吉川幸	参加

1.寺澤 孝文 他に参加しますか?

はい いいえ

・プログラム2 ライトニングトーク&パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、具体的な解決策を提示するというよりは、学生中心の大学教育を実現する時に、それをチームとして行う際のヒントや、より効果的な連携や協働を実現するための論点などを、登壇者の皆様と一緒に話しする中で探ることを目的としています。

学生中心の大学教育に関して、その背景ですが、文部省高等教育局が「大学における学生生活の充実方策について（報告）-学生の立場に立った大学づくりを目指して-」を平成12年6月に発表しました。この、いわゆる「廣中レポート」は、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への転換を提言しています。このときは、正課外教育の意義を捉え直す、といった文脈で受け止められましたが、昨今も、教員個々の研究活動を背景とした講義で、何を教えたかに重点を置く教育から、授業や学生間の学びを通して学生が何ができるようになったかという、学習者中心へのシフトが論議されています。これを踏まえて、ライトニングトークとパネルディスカッションを実施します。

○登壇者

・飯迫 八千代

（ポートランド州立大学 パブリックサービス研究・実践センター（GPS）

国際プログラムマネジャー兼ファースト・ストップ・ポートランドプログラムディレクター）

・三好 智子

（岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）くらしき総合診療医学教育講座 准教授）

・西田 陽介

（岡山大学学術研究院社会文化科学学域（経済） 准教授）

・田中 岳

（岡山大学副学長（入試改革担当）全学教育・学生支援機構教授）

○モデレーター

・石田 衛

（岡山大学副理事（教学マネジメント担当）全学教育・学生支援機構教授）

・アンケート

今後のFD・SD研修改善のため、ぜひとも下記のフォームよりアンケートにご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=_XthnhLXbkWrH5xyw61840YTAF0-eDJP51ZjCdjtHtUQzBXM1Y2ME5ZTkZKNjc5UTIUWFM2RzdGQy4u